ブルー・マウンテンズ国立公園、ワラダ・アボリジナル・センター視察

みずほ幼稚園 副園長　本橋 清彦

１　はじめに

2019 年 9 月 7 日朝、私立学校教員海外研修団は、7 時にブリスベンのホテルを出発し、ブリスベン空港からシドニー空港に向かった。30 分ほど便の出発が遅れたため、11 時過ぎにシドニー空港に到着した。

シドニー空港の気温は少し涼しいが、まだ半袖でも過ごせるような気温であった。しかし、ブルー・マウンテンズは高原で寒いとのことだったので、一行はピックアップしたスーツケースから上着を取り出すなどして準備し、空港からバスでブルー・マウンテンズ国立公園へと向かった。

２　ブルー・マウンテンズ国立公園の基本情報

バスの運転兼ガイドをしてくださった現地在住の小川さんからのお話とホームページやガイドブックによる情報に基づき、以下にブルー・マウンテンズ基本情報を記載する。

ブルー・マウンテンズは、最後に「ズ」（英語では“s”）がつくように、標高 1,000 m程度の山々が 4000km 以上連なった地域の総称である。シドニーから 70km ほど西にあり、車でおおよそ 2 時間（電車でも 2 時間程度）のところに位置する。アメリカのグランドキャニオンともよく比較される渓谷である。なお、「ブルー・マウンテン」の名前は、コーヒー豆とは関係が無い。ユーカリ（500 種類程度）のアルコール分と油分が蒸発して太陽光のプリズム現象により、特に朝に、山々が青くかすんで見えることが由来だそうだ。

ブルー・マウンテンズの位置
（オーストラリア政府観光局公式サイト）

（https://www.climb-europe.com/RockClimbingSydney.html）

イギリスからの移民が始まった 1788 年から 30～40 年後にはブルー・マウンテンズの開拓がはじまった。開拓はシドニーから西に向かい、馬車が通れるような道、グレート・ウェスタン・ハイウェイを構築していく途中、行方を阻んだ断崖絶壁がブルー・マウンテンズだった。ブルー・マウンテンズを越える道約 100km を、3 人の開拓者と囚人や兵隊約 30 名が 6ヵ月でその基礎を作ったということは驚きである。

ブルー・マウンテンズの代表的なランドマークの 1 つとしてスリー・シスターズがある。世界遺産グレーター・ブルー・マウンテンズ（Greater Blue Mountains）にあるこの風化した砂岩の岩は、何千年もの時間をかけて形成された奇岩として有名である。この岩には、先住民のアボリジニの物語がある。

「昔、ブルー・マウンテンズの渓谷に三人の娘と父親が住んでいた。その父親は魔法を使うことができた。ある日、大ムカデが出てきたので娘の一人がそのムカデに向かって石を投げた。その石が谷に落ちていき、谷に住むモンスターを怒らせてしまった。モンスターが襲ってきたので、娘たちを守るために、父親は魔法の杖で娘たちを石に変え、自分は鳥になって空に飛び上がった。しかしその時、父親は魔法の杖を谷に落としてしまい、人の姿に戻すことができなくなった。それ以来、その鳥は杖を探し続けており、娘たちは石のまま、魔法が解かれるのを静かに待っている。」

スリーシスターズ

この物語は、オーストラリア政府観光局公式サイトによると別の物語もあり、「三人の美しい娘と恋に落ちた別の部族の三兄弟がいたが、娘たちの部族の掟のために結婚ができなかった。それを不満に思った三兄弟が力ずくで娘たちを奪いに来たことから部族間の戦争となったため、長老の魔法使いが娘たちの命を守るために彼女らを石に変えた。その後、元に戻す呪文を知る唯一の長老が殺されてしまったため、元に戻れないでいる。」というものである。

「三人の娘」と「解かれない魔法」が共通している。

３　ブルー・マウンテンズ国立公園の観光

暫くの間、バスの窓からポツポツと住宅の密集地があるだけの殺風景な景色を眺めていると、やがて線路とほぼ平行に走っている道路に入り、さらに進むと徐々に標高が高くなっていった。空港を出発してから２時間程、幹線道路から脇の道に入り、高原のリゾート地の街並みを通り抜けると、目的地であるブルー・マウンテンズの玄関口であるカトゥーンバに着いた。

シドニー空港に着いた時から強風が吹いており、「この分では今日のブルー・マウン

テンズのロープウェーは運行しないかもしれない」とのガイドの小川さんの案内であったが、到着してみると風がさらに強く冷たく吹いており、ロープウェーはやはり運休していた。

バスを降りて 1 分ほど歩くと、目の前に柵のある展望台があり、その先に突然、大きな渓谷の絶景が開けて見えた。強風ではあったが、空は晴れ渡り、遠くまで渓谷が開けているのがはっきりと見え圧倒的であった。開拓者たちもさぞや驚いたことと推察される。驚く気持ちが少し落ち着いてから渓谷の左を見ると、バスの中で名前の由来を聞いたスリーシスターズの岩々が見え、あらためて感動した。

展望台の柵の下はまさに断崖絶壁であり、飛ばされそうな強風の中、足がすくんだ。この渓谷は、ロープウェーに乗って上から見ることができるほか、ケーブルカー等で下に降りることもできる。下には遊歩道があり、自然学習を行う学校などもあるとのことである。今回は視察しなかったが、カトゥーンバから南西に 1 時間 30 分ほどの場所には、発見されている中では世界最古のジェノラン鍾乳洞群もある。

展望台からの景色

参加者の集合写真（展望台にて）

４　ワラダ・アボリジナル・センターの基本情報

スリーシスターズが見える展望台から少し戻ったところにワラダ・アボリジナル・センターがある。二階には、ランチを食べるレストランがあり、地下には、アボリジニやオーストラリアの歴史についての展示がなされていた。アボリジニに関する商品等を販売するお土産店もある。

５　ワラダ・アボリジナル・センターの視察

ワラダ･アボリジナル･センターにおいて、アボリジニの方から説明を受けた。アボリジニにおいては、部族に敬意を表することが重要であるので、自分はブルー・マウンテンズの地域以外の部族として、まず、この地に敬意を表するとお話を始められた。

写真の地図は、先住民であるアボリジニの言語で色分けされている。つまり色の数だけ言語があるとのことである。この地図は、それまで訪問した学校に必ず掲示されており、何の地図であろうかと思っていたところであったが、ここで謎が解けた。

今回の研修の始まりでブリスベン空港に到着したときに出迎えてくれたバスの運転兼ガイドの武田さんから、オーストラリアについての概要をお聴きした際、まずはアボリジニについての説明があったのだった。オーストラリアでは、アボリジニの文化を尊重しており、国内のいたるところでアボリジニの言葉などが見られるとのことだった。ちなみに先述の小川さんからは、コアラはユーカリの葉しか食べず水を飲まない動物なので、アボリジニ語で「コアラ」は「No Drink」の意味なのだと説明を受けた。

アボリジニの方からの説明に戻るが、アボリジニと一口に言っても海辺の部族や中央の部族では文化も異なるということである。海辺の部族には潮の満ち引きで道を作って魚を捕るなどの文化があり、中央には砂漠の民族がおり、火を使って農作物の高さをそろえる文化や、火を使ってカンガルーを集めて捕まえるような文化を持っている部族もあるとのことである。共通しているのは、どの部族も王や女王といった身分制度はなく、長老やアンクル（叔父）といった人物の知識や経験を物語として伝え、教えを授かることで集団が形成されている。血がつながっていなくても精神的に長けた人物がアンクルになれるということであった。リスペクトをする、されるといった関係とのことである。それらの関係の中で、教訓や生き方を歌やダンスにして後世に伝えていくのである。

アボリジニの最も重要な特性と考えられているのは、戦闘的でないという点である。生活用具の中には「盾」もあるが、およそ戦いでは役立たないくらい小さなものであり、オーストラリアのお土産で有名なブーメランも、実は戦闘に使うものではないそうである。

そして、一般的にはどの母親の子供であるかを大切にするため、親族の話をする際は、母系の先祖から話をするとのことである。マザーランドというように、土地が母親であり、空は父親であると考えているとのことだ。

小川さんのお話では、アボリジニの歴史の長さについては諸説があるが、そもそも大陸が移動する際に島伝いに渡って来たのではないかとされており、文字は持たないが絵画で事柄を伝承してきたとのことである。説明を伺った部屋には、多くのアボリジニの絵もあったが、それぞれの部族で特徴があり、点で描いた絵や線を使って表現した作品が多かった。これらの絵は物語になっており、モチーフ毎に意味があるという。善と悪のバランスなどをコンセプトとしたものが多い。一見、一般の方のように見えるプロのアーティストもいらっしゃるそうで、時々来日もしているとのことである。

オーストラリアでは、1938 年から 1967 年にかけ、アボリジニを白人と同化させると

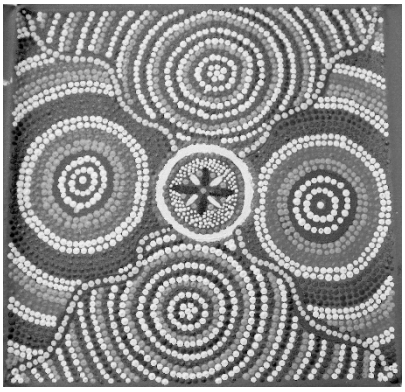
いうことで、親元から子供を無理に離して英語を教えるという「白豪主義」政策がとられた。これらの世代は「Lost Children」と呼ばれ、世界的な人権問題となった。その後、オーストラリアは、シドニーオリンピックの際に飛行機雲で「Sorry」と書くなど、政策の反省と先住民への謝意を明示し、現代においてはこの政策は廃されている。

現在、アボリジニはアーストラリア総人口の 1～3%程度に減っており、純血はとても少ないとのことである。婚姻について特に制限はないとのことだ。アボリジニは、政府が提供する安価なアパートに多く住んでおり、アルコールに弱い体質を持つ。アボリジニを支援する政策もあるが、誇りをもって文化を伝えていこうという人も多く、また、スポーツで活躍する人も多い。訪問した後、つまり、この文章を書いている時に日本で開催されるラグビーワールドカップの代表選手にも一人のアボリジニがおり、ウェアの図柄の一つにアボリジニアーツが入っているとのことだ。

６　まとめ

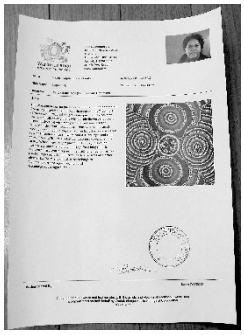
学校等教育機関がある都市だけを訪問していると気が付かないが、ブルー・マウンテンズを視察することで、若干ではあるがオーストラリアの広大な国土を実感することができた。また、アボリジニの歴史について、日本ではあまり知ることができないことを知ることができた。研修後、オーストラリアの歴史に関しての書物等を探したが、主に観光のガイドブックばかりで、専門書のようなものは見つけることができなかった。

以前、自園を訪問されたオーストラリアの学校の教員の方からブーメランのお土産等をいただいたことがある。その時は先住民の文化に関した定番のお土産という認識であったが、今回初めてその意味や価値を深く理解できた。昨今、多様性を尊重することの重要性が強調されているが、ワラダ・センターの訪問の際、日本におけるアイヌ民族とアボリジニの類似性に関して研修員の一人から質問が出たときに、少数民族の尊重が他人事でないことに思い至り、少数民族の文化を守ることの重要性を改めて感じた。



購入した絵画
(Bush Tomato Dreaming)

そこで、自園の子供たちにもそのことを少しでも、漠然とでもいいので理解してもらいたいと考え、また、何らかの形でアボリジニの文化に貢献したいという気持ちから、翌９月８日の自由時間に、シドニーのギャラリーでアボリジニの小さな絵を買った。店にはお土産用の簡易なものもあったが、できるだけ本当の文化の保存に貢献したいと思い、作者の証明



絵画の証明書

書付きのものを購入した。

これらの情報は、書物にはあまり記載がなされておらず、インターネットにおいても日本語ではほとんど紹介されていない事柄であるので、是非、できるだけ多くの教員の方に知って欲しいと思い、アボリジニについて少し多めに紙面を割いた。今回は、ICT、アクティブラーニングをテーマとした視察であったが、それらは、「どう学ぶか」の視点ではあるが、「何を学ぶか」という点では、少数民族や失われそうな文化を学ぶ大切さ、つまり多様性（ダイバーシティ）の大切さも改めて知る旅となった。

参考： オーストラリア政府観光局公式サイト　https://www.australia.com/ja-jp
「地球の歩き方 C11 オーストラリア 2019~2020」（株式会社ダイヤモンド社）